

侮蔑した呼称は配偶者暴力を示す

横谷 謙 次*

長谷川 啓 三**

目的：家族内の呼称は家族関係を示すとされる。侮蔑した呼称は家族の葛藤関係を示すと考えられる。また、侮蔑した関係は配偶者暴力(SV)と関連すると言われている。したがって、侮蔑した呼称は配偶者暴力を示すだろう。

方法：対象者は268名の女子学生と149名の男子学生である。質問紙は家族呼称質問紙、ドメスティックバイオレンス簡易スクリーニング尺度、夫婦満足度尺度を含む。

結果：侮蔑した呼称を使用する家族は、使用しない家族に比べて有意に夫婦満足度が低く、配偶者暴力が高かった。一方、心理的暴力は二つの家族間で有意な差は示さなかった。

考察：侮蔑した呼称と身体的なSVとの関連がSVの早期発見を促すだろう。

キーワード：侮蔑した呼称、配偶者暴力、家族関係

I. 問題と目的

バイトソンらが二重拘束理論を提唱し(Bateson, Jackson, Haley & Weakland, 1956)、ワツラウィックらが人間コミュニケーションの語用論を執筆してから(Watzlawick, Beavin, & Jackson, 1967)、約半世紀が経った。その間に、人間コミュニケーションの語用論の第二公理——全てのコミュニケーションは内容と関係の側面を持ち、後者は前者をクラス化する、メタ・コミュニケーションとしての機能を持つ——を中心に研究が蓄積されてきた(Bavelas, Chovil, Lawrie, & Wade, 1992; Bavelas, Coates, & Johnson, 2000; Bavelas, Coates, Johnson, 2002)。また、その研究成果が臨床場面でも応用されるようになってきた(花田, 2002; 長谷川ら, 1999; 生田倫子, 1999; 奥野雅子, 2008; 若島, 1999; 横谷, 2008; 横谷・長谷川, 印刷中)。本研究は、先行研究の中の一つとして家族内の呼称(横谷, 2008; 横谷ら, 印刷中)に焦点を当て、その呼称が示す配偶者暴力と夫婦間の不満度を示すことを目的とする。

1) 第二公理の先行研究

Bavelasらは第二公理に基づいた研究を継続して行っており、コミュニケーションの協働モデルを提唱している(Bavelas et al, 2000; 2002)。協働モデルは、会話が話し手によって一方的に構成さ

*教育学研究科 博士課程後期

**教育学研究科 教授

れるわけではなく、聞き手も話し手と同様に会話を構成している、というモデルである。Bavelasら(2000)は初対面の大学生12ペアを対象に一方に危機一髪だった話をする話し手の役割を割り振り、他方にその話を聞く聞き手の役割を割り振った。全てのペアは、聞き手が話し手の話を通常通りに聞く統制場面と話の中で最初の単語が t で始まる単語を数える実験場面とを体験した。その結果、実験場面では、統制場面よりも有意に話の展開が延々となったり、細切れになったりしやすかった。また、Bavelasら(2002)は統制場面では、話し手と聞き手の視線が重なり合う時に、有意に聞き手が「ンーフ」というなずきを多く示すことを示した。これらの実験場面から、聴き手も話に影響を与えるという協働モデルは支持されている。

また、協働モデルは実験場面だけでなく、日常場面でも確認されている。たとえば、フランス語とポルトガル語の *Tu* は非公式な場で使われ、話し手と聞き手とが親密な関係のときに使われる。対照的にフランス語の *Vous* は、公式な場で使われ、疎遠な関係でおおむね使われる。Morford(1997)はフランス語の母語話者は *Tu* か *Vous* を使うとき聞き手との関係を常に気にしていると言っている。また、Koven(2009)は母娘の呼称の使用に着目して、呼称が変わる実例を示している。フランス語とポルトガル語をともに話せるバイリンガルの女性はかつて母親にポルトガル語で親密さを示す *Tu* で話しかけたことがあった。しかし、母親は *Tu* を使われることを拒否した。というのも母と娘で親密な形の呼び方をするのは不適切だと考えたからだ。それ以後、彼女は母親を呼ぶ時は常にフランス語の *Vous* を使っている。この例からも話し手の使用する呼称はその聞き手によって強く影響されるといえる。

長谷川らはこの協働モデルをさらに進めて、聞き手と話し手とはともに会話や対人関係を規定する言語を用いているとし、この言語をマネジメント言語と呼んだ(長谷川ら, 1999)。このマネジメント言語はBavelasらの実験でも確認されている(Bavelas, et al, 1992)。Bavelasら(1992)は被験者をペアにした場合を実験群とし、一人の場合を統制群としたうえで、被験者に図書館での本の借り方を説明するように求めた。その結果、実験群では統制群よりも、手を用いて行うジェスチャーが多くみられ、内容とは関係せず、相手を指し示したり、相手の同意を求めたりするようなジェスチャーが多く見られることを示した。Bavelasらはこれらのジェスチャーを相互作用的ジェスチャーと考えた。このジェスチャーは会話内容ではなく、会話の仕方やお互いの関係を示していると考えられた。ここから、相互作用的ジェスチャーもマネジメント言語の一種と考えられる。

マネジメント言語は臨床場面でも有効であることが知られている。例えば、生田(1999)はダンスの男女ペアを疑似的なカップルと想定して、葛藤的な会話を行わせた。その結果、葛藤的な会話では有意に笑顔が多くみられた。ここから、笑顔表情は、会話によって引き起こされる葛藤を和らげ、2者間の関係を維持する機能があると考えた。つまり、笑顔は話し手と聞き手の関係性を規定する、マネジメント言語と考えられた。また、奥野(2008)は薬学部の学生と素人とのペアで薬剤師役と薬を飲みたがらない患者役を擬似的に設定した。薬剤師役の学生で「ね」「よ」という終助詞を使わないの方がそうでない者よりも有意に患者の服薬を説得することができたを示した。ここから、「ね」「よ」は対人関係を維持しようとする機能を持つ一方、薬剤師としての専門性の認知を妨げる、

と指摘している。この研究からも「ね」「よ」が対人関係を規定するマネージメント言語であるということが考えられる。

生田(1999)や奥野(2008)は有益であるが、疑似的な場面を設定しているため、実際の臨床場面でも有効であるかどうかは依然不明である。もちろん、いくつかの研究は臨床場面でも使用されているが、ケース数が少なく、結果が一般性を持つかどうかは不明である(例えば、若島, 1999)。一方、家族内の呼称は臨床場面でも有効であることを示している。横谷(2008)は、一般学生に家族内の呼称と家族内の暴力を質問紙で調査したあと、家族の問題を詳細にインタビューした。このインタビュー結果を基に児童相談所の勤務歴3年以上の二人の臨床心理士がその問題を査定したところ、二人の臨床心理士が見てもいくつかの家族は児童相談所による介入が必要とされると判断されていた。また、この問題となる家族を特定の呼称は約93%の確率で判別していた。また、男子高校生117名に家族内の呼称と家族機能質問紙とを調査した結果、特定の呼称は家族の非機能性と有意に関連していた(横谷・長谷川, 印刷中)。ここから、特定の呼称は家族の非機能性と関連し、かつ、児童相談所などの臨床場面でもスクリーニングとして有効に使えることが示唆される。

横谷(2008)の研究は有効であるが、特定の呼称がなぜ特定の関係を示すか、ということについて理論的に示していない。例えば、横谷ら(印刷中)は特定の呼称が家族機能と関連し、家族機能を低下させると実証的に示している。しかし、呼称と家族機能が関連するという理論的基盤は説明していない。つまり、特定の呼称が臨床的に有効であることは実証的に指摘されているが、その理論的基盤は不十分であるといえる。

2) 侮蔑した呼称の理論的基盤

そこで、本研究では「侮蔑した呼称」に着目して、呼称の理論的基盤を示す。侮蔑した呼称とは、「罵倒を示す接辞」、「動物名」の2つである。いずれも奇異な呼称——一般的には見られない珍しい呼称——の下位カテゴリーに該当する(横谷・長谷川, 2009)。「罵倒を示す接辞」とは「くそ〇〇」(例:くそ親父)と「ばか〇〇」(例:馬鹿野郎)「〇〇すけ」(例:ちびすけ)、「〇〇さく」(例:ぬけさく)、「くされ〇〇」(例:くされ小僧)などであり、明らかに相手を罵倒している(絳, 2001; 岡野, 1969)。動物名とは、「サルすけ」「たぬき」などであり、人の身体的特徴、もしくは、性格的特徴を動物のようになどにたとえた罵倒語と考えられる(堀内, 1978)。

本研究で使用する理論的基盤は、協働モデル(Bavelas et al, 2000; 2002)、マネージメント言語(長谷川ら, 1999)、家族呼称理論(鈴木孝夫, 1972)、スピルオーバー仮説(Margolin, Christensen, John, 1996)の4つである。初めの二つについては既に説明しているため、ここでは後の二つについて説明する。鈴木(1972)は日本人の家族内の呼称が常に呼び手と呼ばれ手との関係を示しているということを示した。例えば、ある女性がある男性を「お父さん」と呼ぶ場合、その女性は彼を父親であると認めていると同時に、自分も彼の子どもであることを認めている。したがって、「お父さん」という呼称は父子関係を示していると考えられる。実際、再婚したばかりの家族では、義理の父親をなかなか「おとうさん」と呼べない子どもが多くいる。また、日本人の父親は娘の婿が気に入らない場合は、その婿から「お父さん」と呼ばれることを拒否する。いずれの場合も呼び手・呼ばれ手のい

侮蔑した呼称は配偶者暴力を示す

れかが父子関係を認めたくないために、「お父さん」という呼称の使用を拒否していると考えられる。こういった例からも呼称は家族関係を示していると考えられる。

スピルオーバー仮説とは一つの嫌悪的な関係は家族内の他の関係も嫌悪的にする、という仮説である (Margolin, Christensen, John, 1996)。マルゴリンら (1996) は73の家族を2週間に渡って調査し、夫婦間、親子間、兄弟間、家族全体の嫌悪的な関係をそれぞれ毎日調査した。その結果、ある日の嫌悪的な関係は次の日の同じ時間に再発しやすく、また一つの嫌悪的な関係 (例えば夫婦間) は別の関係 (親子間) にも影響しやすく、家族全体を嫌悪的な雰囲気になせやすいことを示した。また、ジョンソンらは警察官の家族を調査し、警察官の親が自分の家族を犯罪者のように扱えば扱うほど、その親から配偶者への暴力はますます増加した (Johnson, Todd, & Subramanian, 2005)。これらの結果から、一つの嫌悪的な関係は他の関係及び家族全体を嫌悪的にさせ、配偶者への暴力を増加させると考えられる。

これらの理論的枠組みに侮蔑した呼称を入れると、以下のようなことが考えられる。まず、侮蔑した呼称は、呼び手が呼ばれ手を侮蔑するという関係を示している (鈴木, 1972)。また、侮蔑した呼称は、呼び手と呼ばれ手の両者によって決定されるため、侮蔑した呼称は侮蔑した関係を構築していると考えられる (Bavelas et al, 2000; 2002)。侮蔑した呼称が侮蔑した関係を構築しているならば、侮蔑した呼称は侮蔑する関係を規定していると考えられる (長谷川ら, 1999)。家族内の一つの侮蔑した関係は、他の関係や家族全体も侮蔑的にしやすいと考えられる (Margolin, Christensen, John, 1996)。侮蔑した家族関係は配偶者暴力を増加させる (Johnson et al, 2005)。ここから、侮蔑した呼称は配偶者暴力を示すと考えられる。

夫から妻への配偶者暴力 (SV) の問題は非常に重要である。World Health Organization は SV が女性の健康に重大な結末をもたらす重要な問題であるということを認めている (Garcia-Moreno et al, 2006)。また、SV の日本の比率は他の先進国とほとんど差がないことも示されている (Garcia-Moreno et al, 2006)。この高い率にも関わらず、SV は依然隠された暴力であることが示されている (Edin & Högberg, 2002; 深澤, 西田, & 浦, 2003)。Edin & Högberg (2002) は経験豊富な助産師に調査を行い、彼・彼女らの長い経験を持ってしても SV を見つけることは困難であると感じていることを示した。また、助産師たちは SV を聞くことによって、患者との信頼関係が崩れてしまうことを危惧していた (Edin & Högberg, 2002)。ここから、エディンら (2002) は助産師らが親密な患者との関係を壊さない SV の指標を探している、と指摘している。侮蔑した呼称はその指標の一つになりうる。なぜなら、家族の呼称に関する質問は直接 SV を聴く質問に比べてより非侵襲的だからだ。特に呼称の質問を夫婦ではなく、その子供にした場合、更に非侵襲的である。したがって、本研究では大学生に家族の呼称についての質問を行った。SV を査定するために CTS2 (Straus et al, 1996) の短縮版が使用された。また、呼称と SV との関連を裏付けるために夫婦間満足度も評価した。

本研究の仮説は以下の通りである。A-1. 侮蔑した呼称を使用する家族は、そうでない家族に比べて夫婦間満足度が低いだろう。A-2. 侮蔑した呼称を使用する家族は、そうでない家族に比べて身体

的なSVが高いだろう。A-3. 侮蔑した呼称を使用する家族は、そうでない家族に比べて心理的なSVが高いだろう。

II. 方法

1) 手続きと対象者

東北大学の2人の教員が本調査に倫理的な問題がないことを確認した後、A大学の教育学部(A)、B歯科衛生士学院(B)、C教育大学(C)、D大学(D)、E女子大学(E)に調査協力を依頼した。そのため、データは4つの大学と1つの専門学校からなる。

通常のクラスのと、それぞれの大学もしくは専門学校の教員が生徒たちに本研究の質問紙の意図、匿名性、内密性を説明した。対象者はA68名、B52名、C152名、D91名、E59名である。268名の女子学生と149名の男子学生が調査に自主的に参加し、5名は性別を答えなかった。対象者から質問があった際はそれぞれの教員が質問に答えた。対象者が記入を終えた後、それぞれの教員が質問紙を回収し、それを第一筆者に送った。

2) 尺度

①**家族呼称質問紙(横谷・長谷川, 2009)**:対象者は家族の呼称を7×7の行列の中に記入した。まず自分の家族の親族名(例:父親、兄、姉)を第一行と第一列の欄内に入力した。それから、呼称を書き入れた。もし、適切な呼称があれば、対象者はその呼称を選んだ。もしなければ、対象者は具体的な呼称を書き込んだ。

「ハゲ」、「豚」、「猿」の使用例がそれぞれ、2、1、1例ずつあった。ただし、「ハゲ」は同一家族で2例見られ、息子と娘がそれぞれ父親を「ハゲ」と呼んでいた。また、「豚」と「猿」も同一家族で見られ、母親が娘を「豚」と呼び、息子を「猿」と呼んでいた。なお、「ニラ」の使用例は1家族で見られ、兄弟間で使用されていた。「ニラ」という呼称は植物名であるため、動物名には当たらない。しかし、ニラが硫黄化合物特有の臭いを発しており、その臭いを個人の身体的特徴として当てはめているならば、罵倒語の一種と考えられる(堀内, 1978)。したがって、「ニラ」も罵倒語の一種と考えた。これらの呼称を使用する3家族を侮蔑した呼称群とした。一方、これらの呼称を使用しない家族を非侮蔑した呼称群とした。

②**配偶者暴力**:対象者はthe Domestic Violence Screening Inventory [DVSI] (石井ら, 2003)を答えた。DVSIはthe Conflict Tactics Scale 2 (Straus et al, 1996)の短縮版である。DVSIは高い信頼性を持ち、有効性が確認された質問紙である。本来は3つのセクション、つまり、心理的、身体的、性的暴力を含む。しかし、本研究では、あらかじめ性的暴力の質問は除いた。なぜなら対象者は両親の性的行動について知らないと考えられたからである。したがって、本研究のDVSIは心理的と身体的暴力のみを査定しそれぞれ心理的SV、身体的SVとした。また本研究では主語と目的語の「パートナー」「私」をそれぞれ「父親」「母親」に変えることで、それを子ども用にも変えた。例えば、心理的SVでは「父親は母親に対して大声で怒鳴った」があり、身体的SVでは「父親は、母親にナイフや凶器を向けたことがある」などがある。11項目のDVSIは一年以内にSVを見た生徒は6件

侮蔑した呼称は配偶者暴力を示す

法で答え（1回から20回以上）、一年以内に見たことのない生徒は今までに見たことがあるかもしくはまったく見たことがないかを答えた。3項目の心理的暴力と8項目の身体的暴力のDVSIの α 係数はそれぞれ.76と.87であった。

③**夫婦満足度**：対象者は子どもの視点から見た夫婦満足度（Couple Satisfaction：CS）にも答えた（諸井，1996）。諸井（1996）はthe Quality of Marriage Index（Norton，1983）の一部を翻訳し、子ども用書き換えた。CSは日本では非常に高い信頼性を示し、多くの領域で使用されている。6項目のCSは4件法であり、CSの合計点が夫婦満足度を示す。CSの α 係数は.95であった。

3) 分析

本研究の群はnが3と少なかったため、正規性を前提することは難しい。そのため、ノンパラメトリック検定を行った。2群間を比較する際は、マン・ウィットニー検定を用いた。

Ⅲ. 結果

1) 基本統計量

仮説検定の前に群間の基本統計量を比較した。結果は表1に示す。表1から群間に有意な基本統計量の差は見られない。したがって、これらの群間の基本統計量の差が仮説検定に影響を与えているということは考えにくい。

2) 仮説検定

A-1. 侮蔑した呼称を使用する家族は、そうでない家族に比べて夫婦間満足度が低いだろう：表1に結果を示す。表1から、侮蔑した呼称を使用する家族は、そうでない家族に比べて、夫婦満足度が有意に低いことが分かる。ここから仮説A-1は支持された。

A-2. 侮蔑した呼称を使用する家族は、そうでない家族に比べて身体的SVが高いだろう：表1に結果を示す。表1から、「侮蔑した呼称を使用する家族は、そうでない家族に比べて、身体的SVを有意により多く行うことが分かる。ここから仮説1-2は支持された。

A-3. 侮蔑した呼称を使用する家族は、そうでない家族に比べて心理的SVが高いだろう：表1から、侮蔑した呼称を使用する家族は、そうでない家族に比べて、心理的SVの頻度は多いものの、有意

表1. 侮蔑した呼称の基本統計量と仮説検定

	侮蔑した呼称		統計値	効果量
	あり n=3 平均値(標準偏差)	なし n=395 平均値(標準偏差)		
年齢	18.6 (1.1)	19.4 (1.8)	$U=400.0$	$d=0.5$
性別(男性の比率)	33%	34%	$\chi^2=0.0$	
実家住まい	66%	52%	$\chi^2=0.2$	
家族人数	3.6 (0.5)	4.7 (1.1)	$U=234.5$	$d=0.9$
夫婦満足度	6.6 (1.1)	17.3 (5.0)	$U=420^{**}$	$d=2.0$
身体的SV	1.0 (1.7)	0.3 (2.7)	$U=378.5^*$	$d=0.1$
心理的SV	5.3 (8.3)	2.8 (4.6)	$U=420.0$	$d=0.8$

Note: **: $p < .05$, *: $p < .01$, SV: 夫から妻への配偶者暴力

差は示さないことが分かる。ここから仮説 A-3は支持されなかった。

IV. 考察

1) 臨床的意味

本研究は侮蔑した呼称がSVと関連することを初めて実証的に検討した。その結果、侮蔑した呼称を使用する家族は、使用しない家族に比べて、有意に夫婦間満足度が低く、身体的SVも高かった(仮説 A-1と仮説 A-2)。しかし、心理的SVは有意な差を示さなかった(仮説 A-3)。これらの結果から侮蔑した呼称が単なる単発の侮蔑表現ではないということが考えられる。なぜなら、侮蔑した呼称が単発の侮蔑表現ならば、侮蔑した呼称は夫婦関係や身体的SVと関連せずに、心理的SV(暴言など)とのみ関連するからである。対照的に、本研究の結果は侮蔑した呼称が夫婦関係と身体的暴力とのみに関連することを示した。ここから、侮蔑した呼称は夫婦関係の不満度やそういった関係が生む身体的暴力を表すと言える。侮蔑した呼称がSVと関連するという知見は、侮蔑した呼称がSVの発見に役立つことを意味する。侵襲性の低い呼称の聞き取りは現場のニーズに合致したものであり(Edin & Högborg, 2002)、SVに苦しむ被害者を早期発見するのに役立つだろう。

侮蔑した呼称が心理的SVと有意な関連をもたなかった理由として、心理的SVが侮蔑した関係を必ずしも前提にしないということが考えられる。例えば、西澤ら(2003)は日本のカップルは心理的SVを経てから身体的SVを含んだ深刻なSVに至る、ということを示した。この指摘から、心理的SVを体験している者は必ずしも身体的SVほど侮蔑された関係に至っていないということが推察される。つまり、心理的SVを体験している者の中には侮蔑した関係にまで至っていないものが多数含まれると考えられる。本研究の対象者の中にも心理的なSVは体験しているが、侮蔑した関係を体験していない者が多数いたことが考えられる。その結果、侮蔑した呼称が示す侮蔑した関係と心理的SVが必ずしも対応しなかったと考えられる。

2) 理論的意味

本研究は、二重拘束理論(Bateson et al, 1956)、人間コミュニケーションの語用論(Watzlawick et al, 1967)、協働モデル(Bavelas et al, 2000; 2002)、マネジメント言語(長谷川ら, 1999)という理論モデルに基づいて、侮蔑した呼称が侮蔑した家族関係を示した初めての研究である。もちろん、先行研究においても特定の呼称が特定の家族関係および家庭内暴力と関連することが指摘されている(横谷, 2008; 横谷, 長谷川, 印刷中)。しかし、これらの研究は実証的な関連は示しているものの、なぜそのようになるのか、という理論的な問いには答えていない。一方、本研究は先行研究からの理論的方向付けを明確にしながら、4つの理論的枠組みを用いて、演繹的にその説明を試みた。この点に本研究の価値がある。

3) 本研究の限界と今後の方向性

本研究は侮蔑した呼称とSVとの関連を実証的に示した。しかし、侮蔑した呼称が先行研究の指摘する葛藤関係(Margolin et al, 1996)を実際に現しているかどうかは不明である。この点については葛藤度を用いて、呼称と葛藤との関連を検討する必要がある。また、侮蔑した呼称がSVを実際

侮蔑した呼称は配偶者暴力を示す

に受けている家族に多いののかも不明である。SV を実際に受けている臨床群を対象に呼称の聞き取りを今後行う必要があるだろう。特に子どもではなく、配偶者本人から聞き取る必要があるだろう。加えて、侮蔑した呼称(例:ハゲ)と他の類似した呼称(例:お前)とはどのように異なるのか、ということについても検討できていない。この点については、侮蔑の程度を呼称ごとに調査していく必要があるだろう。

本研究は上記のような限界はありながらも、呼称の概念を理論的に説明し、侮蔑した呼称がSV と関連することを実証的に示している。本研究の知見はSV を呼称によって発見しうることを示唆しており、こういった示唆はSV を早期発見・予防に役立つだろう。

V. 謝辞

東北大学、宮城高等歯科衛生士学院、宮城教育大学、志学館大学、鹿児島純真女子大学の生徒様の寛大なご参加に厚く御礼申し上げます。また、対象者を集めるのに協力していただいた安保英勇准教授、佐藤陽子先生、久保純也先生、石井佳代先生、石井宏祐先生に感謝申し上げます。

【参考文献】

- Bateson, G., Jackson, D. D., Haley, J., & Weakland, J. H. (1956). Toward a theory of Schizophrenia. *Behavioral Science, 1*, 251-261.
- Bavelas, J. B., Chovil, N., Lawrie, D. A., & Wade, A. (1992). Interactive gestures. *Discourse Processes, 15*, 469-489.
- Bavelas, J. B., Coates, L., & Johnson, T. (2000). Listeners as co-narrators. *Journal of Personality and Social Psychology, 79*, 941-952.
- Bavelas, J. B., Coates, L., & Johnson, T. (2002). Listener responses as a collaborative process: the role of gaze. *Journal of Communication, 52*, 566-580.
- Edin, K. E., & Högberg, U. (2002). Violence against pregnant women will remain hidden as long as no direct questions are asked. *Midwifery, 18*, 268-278.
- 深澤優子, 西田公昭, 浦光博. (2003). 親密な関係における暴力の分類と促進要因の検討. 対人社会心理学研究, 3, 85-91.
- Garcia-Moreno, C., Jansen, H., Ellsberg, M., Heise, L., Watts, C. (2006). Prevalence of intimate partner violence: findings from the WHO multi-country study on women's health and domestic violence. *The Lancet, 368*, 9543, 1260-1269.
- 花田里欧子. (2002). 葛藤の意思決定状況におけるコミュニケーションに関する研究. 家族心理学研究, 16 (1), 1 ~ 12.
- 長谷川啓三, 若島孔文, 田上恭子, 渡部敦子, 佐藤宏平, 菅原雪絵, 山内裕恵, 生田倫子, 松橋仁美, 三澤文紀. (1999). コミュニケーションのマネージメント的側面に関する実験的研究 (7) ——臨床に役立つ基礎研究はいかにして可能か—— 日本家族心理学会第16回大会発表抄録集, 41.
- 堀内克明. (1978). 罵倒語の比較文化 (けんか〈特集〉). 言語生活, 321, 50 ~ 59.
- 生田倫子. (1999). 葛藤場面における表情の自己制御的機能について カウンセリング研究, 32, 157-162.

- 石井 朝子, 飛鳥井 望, 木村 弓子, 永末 貴子, 黒崎 美智子, 岸本 淳司. (2003). ドメスティック バイオレンス (DV) 簡易 スクリーニング 尺度 (DVSI) の作成 および 信頼 性・妥当 性 の 検討. *精神医学*, 45, 817-823.
- Johnson, L. B., Todd, M., & Subramanian, G. (2005). Violence in Police Families: Work-Family Spillover. *Journal of Family Violence*, 20, 1, 3-12.
- Koven, M. (2009). Managing relationships and identities through forms of address: What French-Portuguese bilinguals call their parents in each language. *Language & Communication*, 29, 4, 343-365.
- Margolin, G., Christensen, A., John, R. S. (1996). The continuance and spillover of everyday tensions in distressed and nondistressed families. *Journal of Family Psychology*, 10, 3, 304-321.
- Morford, J. (1997). Social indexicality in French Pronominal address. *Journal of Linguistic Anthropology*, 7, 1, 3-37.
- 諸井克英. (1996). 家庭内労働の分担における衡平性の知覚. *家族心理学研究*, 10, 15-30.
- Norton, R. (1983). Measuring marital quality: A critical look at the dependent variable. *Journal of Marriage and the Family*, 45, 141-151.
- 岡野信子. (1969). 山口県萩市方言の待遇表現法. *国文学研究 (梅光女学院短期大学国語国文学会)*, 5, 175-186.
- 奥野雅子. (2008). 会話内容と文末表現の合意効果への影響力. *家族心理学研究*, 22, 141-153.
- 桂 (スガ) 秀実. (2001). 完璧な罵倒語は存在しない (特集 ことばの最前線). *國文學: 解釈と教材の研究*, 46, 12, 20-23.
- 鈴木孝夫. (1972). 日本人の言語意識と行動様式. *思想*, 572, 102-113.
- 若島孔文. (1999). 葛藤の会話場面における「回避的コミュニケーション」の生起のメカニズムに関する研究——ディスクリミネーションが生起する状況の解明にむけて——. 東北大学教育学研究科, 博士論文, 未公開.
- Watzlawick, P., Beavin, J., & Jackson, D. D. (1967). *Pragmatics of human communication: A study of interactional patterns, pathologies, and paradoxes*. New York: W. W. Norton & Company (山本和郎監訳1998 人間コミュニケーションの語用論—相互作用パターン, 病理とパラドックスの研究— 二瓶社).
- 横谷謙次. (2008). 「逸脱」呼称と家庭内暴力に関する一実証的研究—「逸脱」した呼称が「逸脱」した関係を規定することに着目して—, *家族心理学研究*, 22, 14-27.
- 横谷謙次, 長谷川啓三. (印刷中). 「逸脱した呼称」の家族機能測定としての信頼性と妥当性. *家族心理学研究*.

Insulting Family Nicknames Reflect Spousal Violence against Women

Kenji YOKOTANI

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

Keizo HASEGAWA

(Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

Aims: Previous study suggested that nicknames among family members reflected their family relationships. Insulting Family Nicknames (IFNs) also implied tensions between these members. Family tensions reportedly had relationships with spousal violence against women (SV). Therefore, IFNs would reflect SV.

Methods: Participants were 268 female and 149 male university students. Questionnaires included the whole family nickname questionnaire, domestic violence screening inventory, and couple satisfaction scale.

Results: Families with IFNs had less couple satisfaction and more physical SV than those without IFNs. Psychological SV was not significantly different between families with and without IFNs.

Discussion: Relationships between IFNs and physical SV will lead to early detection of SV.

Key words : Insulting Family Nickname, Spousal Violence against Women, Family Relationship